
雪はやまない

絢花李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪はやまない

【著者名】

緋花李

【あらすじ】

初雪に町は白色に染められていく。

それはある少年少女の心まで白く、冷たく染めて行くものだった。

『あなたは誰を想っているのですか？』

雪が降るたび動かされる純粋な想いはキミに届くのだろうか

墨天【MIRAI】

「　で、ここはいいな。次は　」

数学の授業中。

正直言つてめんじくさい。今さら昨日やつた授業をしたつて何も面白いことなんてなかつた。

七峰未来、高校2年。

未来ははとりあえず黒板の板書だけはしていたが、その内容も昨日の授業とほとんど同じ。『復習』なんてめんじくさいことをなぜやるのだろう。授業を受けるなら新しいことを覚えたいのに、同じことをやつしていくは意味がないと思つた。

「……ちょっと未来」

いきなり横から声をかけてきた少女。
この少女は未来の『幼馴染』の水崎愛奈。

小学校から中学、高校となぜか一緒にになつてしまつた腐れ縁。そう、未来は思つている。

「んだよ、授業中だぞ。静かにしてろよ」

愛奈の方に顔を向け人差し指をたてて口元に当てた。
それを見て呆れたようにため息をつく愛奈。長めの茶髪つぽい髪
がさらさらと肩を流れる。

「アンタねえ……一体どこに板書してんの？」

「へ？」

愛奈が指差した先に視線を落とすとぼーっとしていたせいか、ノートは真っ白で逆に机には随分と汚い字で数字がびつしりと書かれていた。

「ザツ……やつべ」

思わず叫んでからしまったと口を抑える。教室内からくすくすと笑いが起こった。

「じゅー七峰。うぬわこだわー」

「は、はい！すいません」

愛奈が隣で肩を落とすのが分かつた。未来は慌てて机の上の文字を消しゴムで消していく。

「（くつや、めんじくせえな……）」

未来は眉をひそめながら静かに文字を消す。

どちらにしろ授業を受ける気は初めからなかつたし、新しいことはやらないようなのでどうでもいいと思い、未来は消しゴムのカスを払うと、頬杖を突く。

未来の席は窓側。いつもなら光がさして温かいのだが今日は生憎曇天で太陽の光は一切地上に降り注がなかつた。

学校帰り。

愛奈とは家が近いため一緒に帰ることになつていて。それを見たクラスメイト達は冷やかしていくが、別に未来は気にはしていなかつた。

学校から家までの距離は1~5kmくらいだ。もちろん徒歩で学校に通つていて。未来の家と愛奈の家は100mくらい離れている。道のりで言えばの話だが。

「未来つてさあ、何か夢中になつてるものとかつてないわけ?」

唐突に話題を変えてきた愛奈に未来は前を向いたまま適当に答えた。

「はあ?「フーん。学校に行く」とと部活する」と?..」

「.....ふうん。カノジョとかにきょーみないの?」

愛奈の質問に未来は肩をすくめる。そしてこやつと笑いつと愛奈の顔を覗き込んだ。

「何?俺のこと好きなのか、愛奈」「

「ばーか。違うよ。ちよつとね」

「あつや」

意味深なことを言つて顔をそらす。愛奈の顔は最近読めなかつた。いつもなら何を考えているのかさえ分かるはずの少女の顔は最近、

未来の知らない顔になりつつある。自分の知らないところで彼女が何をしようか勝手なのだが、なぜか気になってしまふがなかつた。

いつもなら見えるはずの星も見えない曇天の空の下、未来と愛奈はにぎわう街の中を歩いていた。

暁天 【MIRAI】（後書き）

こんにちは！！緋花李です。

恋愛物は初挑戦……友達と書いている漫画でも幼馴染はなかなかいい味出してくれます。

これからよろしくお願ひいたします！！

夜空【AINA】

「じゅあね未来。今日の復讐、じゅんとしなさいよ。」

「じょーかい。愛奈、今日塾だい？『仮をつけるよ』

「うそ、ありがと」

愛奈は笑顔を向け、小さく手を振る未来に手を振り返し、家の玄関のドアを開けた。

「ただいま」

「おかえり、お疲れ様」

愛奈の声に反応したのは姉の杏^{あん}だ。愛奈の家には父はない。母は今、仕事の都合で京都にいるため、最近は帰ってきていないかった。杏は愛奈と5つはなれた姉だ。もうすでに就職し、家の事をやってくれている。

「あれ、お姉ちゃん今日仕事じゃないの？」

「うーん。仕事片付けちゃったから」

杏はイラストレーターをやっている。家で働く仕事を探したうえの決断だった。

そんな姉の優しい心遣いに愛奈はとても尊敬していた。父がいな代わりに愛奈が心配しないように、辛くないようこと今まで頑張つてきてくれたのだ。

愛奈にとつて杏は尊敬でき、一番信頼している人物であり、大好きな人なのだ。

だが、無理ばかりする杏に愛奈はいつもハラハラしていた。

「お姉ちゃん、たまには休んだら?」いつも無理に仕事終わらせて「……」

「大丈夫だよ~愛奈と一緒になら」

そんなことを言しながら杏は愛奈に頬ずりをしてくる。苦笑いを浮かべ愛奈はそれから逃れるため杏をやんわりと押し返した。そして階段に足をかける。

「わたし、これから塾だから。着替えてくるね?」

「はいはーい

最近の杏はなぜか『シスコン』が激しくなってきたように感じる。しかし、嫌だと感じたことはないし、自分が杏の支えになっているのならそれでもよかつた。

「……ふう

かばんを机の横にかけ、手早く着替えを済ませる。塾に行くときは決まってズボンをはいていく。スカートはいていると足元が冷えて集中できないのだ。

そして塾まで30分。塾は近所にあるため、行くまでにさほど時間がかかるない。それまでやることは決まっていた。

『DEAR・RUNA

最近むちゅくちゅくじい（汗

部活大変だよね><

今度の土曜日、未来と一緒に出かけない？

返事待つてます（^ ^）ノ

FROM・AINA』

親友の瑠奈にメールを打った。

「送信つと……」

ケータイの画面に

『送信されました』

の文字が出る。普通なら、メールを送れてホッとするところなのだろうが、今日はなぜか安心できなかつた。安心するどころか、少しだけ……胸の奥が痛んだ。

そして、不思議なことに『あの』言葉が脳裏によぎつた。

『カノジョとかきょーみないの?』

帰り際、未来に言ったあの言葉。あの言葉は、瑠奈に関係する言葉だ。

「（ま、いつか……）」

愛奈は頭を軽く振り塾の準備をする。全て終えてから愛奈はケータイを無造作にポケットへと突っ込む。

ストラップは未来から誕生日プレゼントとしてもらったピンク色の星のストラップと瑠奈からもらつたお揃いのリラックマのストラップしかついていない。

女子高生ならやつていそうなケータイを『デコル』といふこともしない、白の薄型のケータイ。

「（デコルとか、めんどくせこしな……）」

そんなことを思いながら愛奈は部屋のドアを開け、階段を下りる。

「もう行ぐの？」

杏が足音を聞いたのか晩ご飯の準備をしながら聞いてきた。愛奈は頷く。

「うん。早く行っておかなーい。何があるか分かんないし」

「愛奈は心配性だよね～でも、気をつけで行つてきなよ」

「はーい。行つてきますー！」

愛奈は玄関のドアを押し開け外に出ると、秋に向かつている季節のせいか風は少し肌寒かつた。

帰つてきた時もそうだったが曇天は晴れる様子を一切見せない。今日は星も月も、夜に輝きを増すものは何も見えなかつた。

見上げた夜空に何も浮かんでいないことを少し残念に思いながら
愛奈は塾へと足を運ばせた。

夜空 【AINA】（後書き）

本当は塾に行ってからの事も書こうと思つたのですが、途中で作者の頭がフリーズし、内容が吹っ飛んでしまいました（；）

お許しください m（—） m

輝き【MIRAI】

放課後。

バスケ部に所属している未来は部活のため体育館に来ていた。秋になると新人大会がある。そのために現在バスケ部は練習に力を入れているのだ。

ちょうど今は休憩を終えて次の練習メニュー『5対5』の試合形式の練習をしている真っ最中だった。

「リバウンド…しつかりとつて…！」

愛奈の声が体育館の中に響き渡る。コートの中を駆け巡る未来の耳にも届くほど声の大きさだった。

愛奈はバスケ部のマネージャーを務めており、常に選手の動きに目を光らせている。ある意味コーチより怖いかもしない、と言つたら言い過ぎかもしれないが。

その時、ボールを取つた仲間が困まれ、動きが止まつた。

「うと」

近くにいた自分のもとにパスが回つてくる。とりあえずドリブルをついてフロントコートまで運ぶが、相手の守りがなかなか堅い。

「（ビーストかな）」

ドリブルをつきながらどうするべきかと考える。今相手にマークされていない仲間はいない。

もちろん、ボールを持っている未来のところにも、『ゴールには行かせまい』と言つた表情で睨みつけてくる同学年の『依早湊』が

未来をマークしていた。

「（……行くつときやねえよな）」

時間も残りわずか。この状況からしてうだうだとバスを回して力ツトされるよりも、自分で突っ込んでシユートを決めたほうが先決だ。

未来は姿勢を少しだけ低めて湊を振り切った。足には自信がある。

「つづー。」

いきなりスピードを出した未来に驚いたのか湊のそんな声がかすかに聞こえた。仲間を守っていた相手も慌てて未来をマークする。だが。

ボス。

未来のドリブルシユートは見事に決まり、相手の攻撃になつたところで試合が終わつた。

「相変わらず足だけはすぐよな？」

そう赤い顔で息を切らしながらちやかしてきたのは湊だった。未来はタオルで汗を拭きながら唇を尖らせた。

「なんだよ、『足だけは』って……オレだつていひいろ頑張つてるんだつての」

「どーだかなあ。自分で思つてることよりも世間の田は厳しーぜえ？」

「へーへーそうですね」

適当にあしらひて部員を集めていたコーチのもとへと急ぐ。コーチは元バスケ部部長を中学高校と続けていたすごい人物だ。
そんなコーチは未来の憧れでもあった。

「よーし。今田の部活はこれで終わりだ。1年生、片付け頼んだぞ」

そう言つてコーチは踵を返すとそのままひらひらと手を振りながら体育館を出て行つてしまつた。

コーチは何を考えているのか……大会まで一ヶ月ないといつのこと、なぜ早々と切り上げるのだ？ 未来にはわからなかつた。

「未来、おつかれ」

愛奈の声にハツとして振り返ると後ろにはジュースを持った愛奈がいた。

「お、サンキュー」

愛奈から差し出されたジュースのボトルを受け取つてから未来は微笑む。

「最後のショート、あんな所からよく決めたね。無理な体勢だつたから絶対に入らないと思つてたんだけど……」

愛奈がゴールの方をちらりと見てそつと見つた。その言葉にまた唇を尖らせる。

「オレの中では確信してたの！でか、あんだけ一斉に囮まれたら無理でも打たないとつて思つじゃん」

「そーかもね」

未来の説明にくすりと笑つて愛奈は「先に行つてゐから」と体育馆を後にした。

「『』めん、遅くなつた」

「だいじょーぶ。そんなに待つてないから」

愛奈はそう言つと校門の壁から背中を離し、スクールバッグを肩にかけ直す。慌てて学校から飛び出してきたので内心息が苦しかったが、愛奈の手前、そんな表情はできない。

「（カツ）悪いしな）」

不意にそんなことを思つて、未来は心の中だけで苦笑いした。
風がどこからか吹いて来てひゅう、と一人の髪や制服を揺らす。
風は冷たかったが、今は心地よかつた。小さく息を整えながら未来は家路を歩きだす。

「さて、帰りますか～」

「そりしますか~」

そう言つて笑いあう未来と愛奈。幼馴染の一人は他人からみればカッフルだろうが、未来はそんなことを思つたことはなかつた。一度も……なかつたはず。

街を中を歩いて行くとぽつぽつと明かりが付き始め、夜の訪れを知させてくれる。その景色を見るのが未来は好きだ。
淡い明りが輝く街は昼間よりもきれいに見える。その景色は昔から未来の好きなモノでもあつた。

闇が濃くなる一方で街の輝きは闇を照らし、だんだんとにぎわいを増していくのだった。

**輝
き** 【MIRAI】(後書き)

幼馴染の一人。仲がいいために……つていうのを追求したいと思います。

天光【AINA】

「土曜日？・瑠奈と？」

昼休みの中庭。

愛奈は未来を呼び止めて今週の土曜日、瑠奈と約束していたことを話した。

しかし未来は首を少しかしげて「なんで？」と言ったような顔をする。愛奈はその表情に少しムツとして未来に指を突き付けた。

「どーせ暇なんでしょう？ちよつと付き合こなさい」

「……まあいいけど。オレは『暇』だし！」

やつ『暇』のワードを強めて唇を尖らせた未来の顔はまるで幼いころを思い出させる表情だった。心中で微笑むが表情は未来と同じように愛奈も唇をとがらせる。

「ここまで経つても子供なんだから……少しは大人になりなさいよ！」

「るせー！・愛奈だつてガキの頃からそりゃかりじゃねーか！つたぐ、母親じやあるまいし……」

いつもの喧嘩。しかし、未来の最後の咳きに愛奈はどうか寂しさを感じた。

……だが、理由なんてわからない。あの短い咳きに何の意味があつたのだろうか？自分でもわからないことが不思議だった。だが、深くは考えない。昼休みだとはいって、クラスの男子がどこ

で見ているか……『気を配らなければならぬ』のは正直メンデクサイが仕方がない。

愛奈はそれを忘れるよりするよりに不満そうな未来の背中をいつものよつこ こやこつもよつも思いつきり呴いてやる。

「イテーちよ、強すぎーあー背骨折れたー」

折頬まぎれに大げかな動きで背中をさする未来に愛奈は手を引っ込めて顔をそむけた。

「馬鹿言つてないでしゃせりとしなさいーー子供扱いされたくないならねー」

やう言いながらも心の中で「少し強すぎた」とうなだれた。幼いじぶからこのやり取りは続いている。

愛奈にとって未来は『弟』のような存在であった。
だから、つい言ひすぎてしまつ。それは自覚はしてゐるのだが治しそうがない。

未来は背筋を伸ばすと敬礼の真似をした。

「ほら、これでシャキシとなつただろー？」

やうじつていたずらっぽい笑顔を浮かべる未来に愛奈は少しだけため息をついた。

……未来に何を言つても通じはしない やつ思つた瞬間だった。

放課後。

部活を抜け出し、愛奈は美術室に向かっていた。理由は『親友』に会うため。

美術室の前で足を止め静かに扉を開く。そこには外の風景を描く、『瑠奈』の姿があった。

「瑠奈」

「あ、アイちゃんー来ててくれたんだあ」

がたん、と音をたてて椅子を押し、瑠奈はたたたと小走りにせつてきた。

瑠奈は高校でできた『親友』だ。

背も小さいし、顔も声も可愛い。性格だつて優しくて明るいし、成績もいいが体が弱いらしく体育には出られない。いつも見学していた。そんな彼女はクラスの『人気者』だ。

愛奈はそんな彼女を『アコガレ』の存在だと思つていたが、彼女と『親友』になつてからは、純粹にクラスメイトと同じく彼女の事が『好き』だつた。変な意味ではないが。

瑠奈は優しげな微笑みを浮かべながら、「今日はどうしたの?」と首をかしげる。

「アイちゃんが部活の仕事をさぼつてまで来るなんて珍しいね」

「さぼつてるわけじゃないんだよ? それより早く瑠奈に伝えたくてー」

苦笑いの後に瑠奈の両手を握りしめた。瑠奈は突然両手を握られたことになり驚いた表情を浮かべる。だが愛奈は気にしない。

「瑠奈ー！土曜日良いつてーよかつたねー！」

「え？ ほ、ほんと？ ほんと？ ？」

「ううすううと頬を赤らめて問うよつよつ愛奈を見つめてくる瑠奈の表情はどうしようもなく可愛かった。

女の自分が可愛いとと思うのだから誰が見ても今の瑠奈はテレビで出ているアイドルやモデルよりの数倍可愛い。……さすがに言っちゃいかもしれないが。

愛奈はそんなことを思いつつ大きく何度もうなづく。

「ほんと、ほんとーあー……楽しみだなあ土曜日」

「う、うん……わ、緊張するな……」

そう言つて少し困ったように微笑む瑠奈。顔はまだ赤い。
愛奈は瑠奈を手を離すとガツンポーズで思いつきり微笑んだ。

「だいじょーぶーーあたしも出来るだけの事はするからー。」

「うん……ありがと、アイちゃんーわたし、頑張るねー」

そう言つて会つて笑つて笑つて一人の少女は本当に幸せそうだった。

『『『親友』のためなのだから、今は何があつても自分のできるだけの事はしておきたい。

それが、瑠奈のためになるのなり……自分の曖昧な感情は今はどうでもいいと思つた。否、追求するのも面倒だつた。

複雑な感情を心の隅に置いたまま愛奈は冷たい廊下を一人静かに歩いていく。

そんな彼女を見守るのは暖かな太陽の日差しだけだった。

天光 【AINA】(後書き)

ああ・・・

訳分からんことに・・・

何かありましたらお伝えください m (—) m

鈍感【MIRAI】

遂に土曜になり、未来は愛奈に指示された場所に立っていた。

『あのショッピングセンターあるでしょ？その前で10：00に来てくんない？』

愛奈に言われた通り10：00に来たのだが……

「……んだよ。まだ来てねーじやん」

未来はズボンのポケットに手を突っ込みため息を漏らした。周りを見てもいるのはただ忙しく通り過ぎていく見知らぬ人ばかり。家族連れもいるけれどほとんどは仕事があるのかスーツを着ている大人ばかりだ。

もともと人が多いところが好きではない。「こみごみしてい……歩くのも人にぶつからないようにしなければならないからメンドクサイと言うものもある。何より……体が拒絶する。理由は分からな……が……嫌なことに変わりはない。

未来は壁に寄り掛かると持つてきたipodを取り出してイヤホンを耳に付け、音楽をかけた。これと黙って何を聞きたいわけでもない。ただの……暇つぶし。適当に選曲して再生ボタンを押す。それと同時に音楽が耳に入ってきた。

音楽に耳を傾けるわけでもなく、未来はただぼーっと空を見上げ二人が来るのを待っていた。

「『めーん…！時間かかつちゃった…！』

そう言いながら慌てて駆け寄ってきたのは愛奈。そしてその後ろからおずおずと瑠奈がやってきた。

瑠奈はこちらを見ると少し恥ずかしそうにしながら柔らかく微笑む。

「あ、おはよ、」

「よーっす……って愛奈…！おせーよバカ…！」

「はあ…？仕方ないでしょ！着替えるのに時間がかったんだから…！」

「なんこと知るか…！…30分も待たせんな…！人多いし変な目で見られるし…」

「あーあーわかりました…！いちいち細かいんだから…」

愛奈は首を振つて呆れたように肩をすくめた。その行動になんとなくカチンと来たがまた言い争いをするのも瑠奈に迷惑がかかる。それくらい、自分でも考えればわかった。

「つたぐ……！」見て回るんだろう？早くいこせ？」

「うん。そーだねー。アイちゃん、行こう？」

「はいはーー！」

未来はパークーのポケットに手を突っ込みながら店の扉を押し開け、二人が入つてから閉めた。

未来の前を通つて行くときに瑠奈が「ありがと」と言つて微笑む。愛奈はそのまま通過していった。

「（可愛くねーやつ。瑠奈とは大違ひだ……）」

自分の幼馴染は一体どこから変わつてしまつたのか……そんなことを考えながら未来は楽しそうにショッピングセンターを見回している少女たちを後ろから見つめていた。

さんざん店を回り2時間。すでに12：00を軽く超えている。その時すでに未来は精神的にぐつたりしていた。内心ため息をつき、無言で愛奈たちの後を追つ。すると愛奈が不意にケータイを開いて「あつ」と言つた。

「もうこんな時間……お昼にする？」

「うふ。あの……未来君、大丈夫？疲れてるみたいだね」

「あー……へーきへーき。気にすんな」

心配そうに声をかけてきた瑠奈に未来はひらひらと右手を振つてそう言つた。内心疲れていだし、もう帰りたいのだが……そんなこと言つたら恐らく愛奈からの怒りを買うことだらう。それだけは

「めんだ。

未来たちはハンバーガーを買い、席に着いた。

「てかさ、未来さつきから何にも言わないじゃん。何? いつものテ
ンションはどこに行つたのかな~?」

「うつせ! ……人多いとこ、嫌いなんだ」

未来はハンバーガーにかぶりつき、そっぽを向いてからそう呟く。
その呟きを聞いたのか瑠奈が眉をひそめて申し訳なさそうな顔をし
た。

「そつか……『めんね?わたし、一度行つてみたかったの…
と』

「?なんか言つた? 瑠奈」

「えつ! ?何でもない! ! 何にも言つてない! ! 気のせいだよつ!
!」

瑠奈は慌てて大きく首と手を振りジュースを一気に飲み込む。そ
の様子に愛奈がくすりと笑つたのが分かつた。瑠奈はそれに気づい
たのか、かあッと顔を赤らめ、うつむく。

だが未来にはその行動の意味がわからなかつた。声をかけてはい
けなかつたのか?

訳の変わらないまま未来はジュースをズーっと飲み込んだ。

そんな自分を見て幼馴染が悲しそうな顔をしていることに気づか
ず。

鈍感【MIRAH】（後書き）

久しぶりの更新です。

内容がありますが、午後の予定は愛奈視点で行きたいと思います。

思い【AINA】

ショッピングセンターで昼食を済ませ、愛奈たちはショッピングセンターからカラオケ店へと向かっていた。

「なんでカラオケなんだ〜？」

未来がまるでどいかの小学生のような口調で話しかけてきた。振り返つて彼を見ると彼は朝と同じようにパーカーのポケットに手を突っ込み、頭にはフードをかぶつてだらだらと愛奈たちの後をついて来ている。

愛奈は心中で「しゃせうとしない」と思つたが、瑠奈が楽しそうに未来を見ているのでそこは言わないでおく。

「いいじゃん。未来歌つまーし。人の少ないところひいて言つたらカラオケでしょ？」

「どんな解釈だよ、おー……」

「でもみんなでカラオケつていいね～楽しいもん」

「モーモー。だから文句言つな」

「あーあーわあつたよーーじゃ、口にチャック」

そう言つて口の左端から右端にかけてチャックを閉じるよつした。愛奈は大きなため息をつき、首を振る。

……これじゃあ小学生と話をしているようなものだ。瑠奈は一体こんなやつのために『惚れた』と言つのか……

……簡単に要約してしまえば、今日の予定は『瑠奈のため』。瑠奈は未来の事が好きらしい。

「（あたしから見たらただのガキンチョなんだけどなあ……）」

隣でに「に」と嬉しそうに歩いている親友と後ろをだらだらと歩いている幼馴染を交互に見て小さくため息をした。

彼女のため息聞いたのはこの街の誰もいない。そう、誰もイナイはず

「これ。次、瑠奈だよ」

「あ、うん。ありがと未来君」

瑠奈は未来からDAMの機械を受け取り「何がいいかな」と呟きながらタッチペンで画面を叩きながら曲を探し始めた。未来はそれを見て少しだけ微笑んだ。その姿に愛奈の心はなぜか……痛む。ズキズキと。

だが愛奈は歌を歌つていたためそんなことを考えている暇も、二人を見ている暇もない。それに こんな感情、自分は 自分にはないはず。なにせ、知らないのだから。

それに 自分に本当の感情など

……

「（あ……終わった）」

そんなことを考えながら歌つていのうちに曲が終わっていた。ほ

となんぴょーつとしたので、点数は……

「何コ。ちよー低い……」

75点。好きなアニメの曲。この前歌つたときせや88点も行ったのに、なぜこんなにも下がつてしまつたのか……

「愛奈、途中から責めちゃくちゃ小さくなつたナゾー。べつしたんですかー」

明らかに棒読みで未来がいたずらっぽい笑みを浮かべながら声的にそんな感じだつた そつとのが背中に聞こえる。愛奈は体温が急速に上がるのを感じた。

「へ、ひねりー！…ま、次未来の番だよー。」

そつとマイクを未来に押しつける。未来は「ヤーヤ」と笑いながらマイクをするつと愛奈の手から取つた。そしてマイクの電源を入れたり消したり……

愛奈は自分の中で何かがぶち切れ、叫んでいた。

「わざと歌わんかアホ！…」

「るせー！…俺の癖なんだよー。」

「み、未来君。マイク持つて叫ばないで……」

瑠奈が愛奈のすぐ近くまで来てはあ、とため息をついた。どうしたのだろうか？愛奈は心配して彼女の顔を覗き込む。

「……どうしたの？ 瑠奈」

「アイちゃん……わたし、アイちゃんみたいに話せないよ……なんか、きんちょーしちゃう……」

「んー……大丈夫だよ？ 普通に男子と話す感覺で行った方が未来も樂じやないかな？」

愛奈が言いきると未来の歌が始まつた。曲は『アゲハ蝶』。

歌うその横顔は本当にあの未来なのか？と思ひくらう、大人びていた。

「……かつこいーね、未来君。いいな、アイちゃん、未来君みたいな幼馴染がいて……」

「ええ……あんなのが幼馴染ならきっと瑠奈も冷めると思ひよ？・
つるわいし」

「そーかなあ……」

少し羨ましそうに未来を見つめながら言つた瑠奈に愛奈は首を振つて否定した。言つてることは本当だ。本当の、本当。嘘なんかない。

けど……今の幼馴染は今まで見たことがなかつたくらい……カッコいい思つた。……少しだけだが。本当に少しだけ。アリくらい。いや、ミジンゴトくらい。

シンデレラじゃない。絶対に違う。あり得ない！！

愛奈は自分の頭によぎった言葉に自分で否定して自嘲氣味に微笑んだ。

それとは別に……未来に焦がれる瑠奈が羨ましいと……小さく思つた。

思い【AINA】(後書き)

カラオケいいですよねーーー！

この前行つてきました！！しかし点数でないですね。最高88点ですよ、愛奈と同じです。

……それにしても田舎のカラオケ店はやっぱり曲が少ないんでしょうか？県庁所在地にすんでいることが来たときに

「え！？　ないの！？」

と言われました。

DAMって全国共通ですよね！？え、東北だけじゃないですよね！

混乱【MIRAI】

愛奈たちと出かけて3日。もう火曜日だ。

それにしても最近授業に身が入らない。もうすぐ新人大会があるからだろうか……部活の事ばかりが頭に入ってしまう。

「お~い。み~らい~」

「あ? 何? 蓮^{れん}」

こいつは須藤蓮^{すどうれん}。未来の親友で未来の次に頭がいい。まあ、学年2位と言つことだ。

蓮は未来の前の席で、よく話をしながら授業を受けている。今日も蓮は話しかけてきたが……いつもと少し様子が違う。どうしたのだろうか?

「どうした蓮。そんなに焦つて」

「どうしたじゃねえし! お前、しらねえの? バスケ部のコーチいるだろ? なんかやめるらしいぜ」

「ええ! ?」

思わず大声をあげてしまい、また先生からの注意が飛んでくる。だが、未来はただ平謝りしたが、頭の中はひどく混乱していた。

「コーチ……どういふことですか！？なんでの時期に……」

未来は昼休みにコーチの佐々木優斗さざみ ゆうとに会つべく職員室にいた。目の前にはコーチがあり、周りに他の先生たちもいたが今はコーチの真意を聞くためのことしか頭に入つていなかつた。

未来の荒々しい質問にコーチはいつもの穏やかな口調で答えた。

「ん……俺にもいろいろ訳があるんだよ。仕方ないだろ？」

「そんな……！俺たち、後1週間で大会なんですよー。コーチの指導がなくなつたらどうすればいいんですか！？」

今バスケ部の顧問はバスケ初心者の女教師でとてもじゃないが教えられるような人ではない。それだけに未来にとつてコーチの存在はとても大きいのだ。それなのに……。
だがコーチはあくまで微笑みを絶やさない。

「なんとかなるだろ？お前たちの力なら」

そのコーチの発言と微笑みに、未来は

「簡単に済ませないでくださいっ！俺は 僕たちは優勝したい
んです！！けど」

未来は唇を噛み、うつむく。握った拳が震え、目頭は熱くなりそうだった。本当に……自分たちの不甲斐なさに、悔しくて。
周りの先生が何事かこちらを見るのがわかつたが、気になどしていられない。

未来は絞り出すようにして声を出した。

「けど……俺たちは、まだ……まだ弱いから……全然練習試合では勝てないし、やる気はあるんだけど……やっぱり実力が全てで……」

そこまでいふと「一チの眉がピクリと動き、その穏やかな顔は怒りにゆがめられた。

未来はそのあまりの剣幕に押され、言葉をなくす。何か口にしようとしても言葉が喉で詰まつてしまつてうまく出せない。それほど……「一チの顔は怖かつた。

「実力がすべて……確かにそうかもしない。……だから俺はやめるんだよ。俺の力じゃ……お前たちの実力は上げられないどこいか、その実力を下げてしまつ。……それにな」

「一チの言葉が詰まり、顔は怒りから苦渋にゆがんだ。

未来も周りの先生も何も言わない。この職員室に流れるのは教室や廊下から聞こえてくる生徒たちはしゃぐ声だけだつた。

……そつして何分経つただろうか？チャイムが鳴る時間ではないといひからするとまだ3分程度だろうが未来にはそれが酷く長い時間に感じてこのまま逃げだしたい気持ちが徐々に募つて行つた。そのとき、一チがやつと口を開いた。

「もう、俺はバスケができる体じゃないんだ。左腕に……な。マヒが起きていて、もうほとんど何も感じなくなつてる」

「……そ、そんな……」

未来は驚愕に見開かれた目を一チの左腕に向ける。普段ポケットに手を突っ込んでいるため氣づかなかつたが、よく見るとだらんと垂れているようにも感じる。

あまりのことにもう頭がパンクしそうだった。未来はただ呆然と立ち尽くし……なぜか笑っていた。

「あは……はははーも「ううだつていい！俺たちのヒーローは呆氣なく病氣してやめんのかよーあはははー！」

訳のわからないまま職員室をゆっくりと出る。コーチの隣を過ぎていくとき、彼の顔がものすごく悲しそうだつたような気もしたが、もうどうだつて良かった。

未来はふらふらと教室の前に戻ると不気味な笑い声をあげながら泣いていた。

「……未来？」

いぶかしむように幼馴染あいなが後ろから声をかけてきた。ゆっくりと振り返り、未来は目に映つた愛奈に狂つた微笑みを見せた。

「なあ、愛奈。俺たち、見捨てられたのかな？左手が動かないだけで、バスケ教えられないってさーなんなんだよ！訳分かんねえ！」

「未来！落ち着いて…どうしたの？おかしーよー！」

愛奈の細い指が自分の肩に置かれ軽く揺さぶられる。未来はもう、混乱し何が何だか分からない状態だつた。

今、未来の中に『ココロ』がない。あるのは、ただの闇と混乱。その時、愛奈が未来の頭を平手打ちした。しかもものすごい強さで。

「つづーな、何すんだよー！」

「いい加減、用意覚ませ!! 七峰未来!! アンタ何してんの? ただ何も考えずに何言つてんの? 落ち着きなさい!!」

愛奈の一括でクラスのやつらが全員何事かと廊下に出てきた。その中に親友の姿も見える。

未来はこのざわめく生徒たちの声に口々口を取り戻した。落ち着き、呼吸も楽になる。

正直なにがなんだがよく覚えていない。覚えているのは職員室に行つて、コーチと話して、それから……

「落ち着いた?」

愛奈の心配そうな声に未来はハッとして頭を振った。そして彼女に向かつて頷く。

「ああ、うん。じめん、俺なんか……」

「それならいいけど」

愛奈はそう言つてپイッとそっぽを向いてしまつた。その横顔が微妙に赤くなつていたように感じるのは気のせいだろうか?

キーンゴーンカーンゴーン……

チャイムが鳴り、クラスのやつらはみんな教室に戻つて行く。あらものは未来まれをまじまじと見ながら、またあるものは特に興味もなれやう。

やはり、自分だけなにか人と違うのだらう。だから、コーチにあんなことを言って混乱して……

きっと誰も未来の事には気づいてくれない。気づいてくれていたとしても、それは同情だ。

やっぱり……俺は『孤独』なのか？

混乱【MIRAI】(後書き)

未来君暴走！(*・A・)

まじでサーセン○ル

予感【AINA】

初めてみた。あんなに混乱した幼馴染を見たのは、部活のため体育館に向かう愛奈は一人、暗く、冷たい廊下を歩いていた。この廊下は日当たりが悪く、なんだか不気味だ。それと同じで……

「（やつきの未来も……）」

そこまで考えて、愛奈は自分に吐き氣を覚えた。右手で左腕を握りしめる。爪が食い込んでくる痛みに耐えながら、自分のさつきの考えを消した。消しさつた。幼馴染の彼を見捨てるようなことの考えた自分に……嫌気がさす。

だが……先ほどの未来はどこかおかしかった。笑い声も、表情も。精神的な何かがあつたのだろうか？ 愛奈にはわからなかつた。

「アイちゃん！」

優しげな、柔らかな声が耳を打つた。愛奈は左腕から手を離し、声の持ち主 瑠奈に手を振つた。

瑠奈は手を振りながら小走りに愛奈の隣までやつてみると急に顔色を変え、愛奈の左腕を取つた。

「アイちゃん、これどうしたのー？」

「えっ？」

「え、じゃないよー血、血出でるーーー！」

瑠奈の言葉に戸惑い、愛奈は自分の左腕に視線を落とした。見ると、先ほどまで握っていた一の腕のあたりから血が流れている。Tシャツだからなおさらよくわかった。

「あ、あははー」「めん、握つてたら食い込んでたみたいだね。うわあ、痛いわあ……」

「もうーあ、ちょっと待つてね」

瑠奈は自分の持つていたスクールバッグから消毒液と絆創膏を取り出す。そしてきぱきと愛奈の腕の処置をしてくれた。

「あ、ありがと……ってなんでこんなに用意周到なの？」

苦笑いしながら愛奈は処置された腕から瑠奈に視線を戻した。だが瑠奈はまだ眉間にしわを寄せている。

「用意周到にもなるよう……アイけやん、力加減できないからいつもケガするじやん」

確かに。愛奈は頷いて微笑んだ。

「まあ、ありがとね！で、どうしたの？用事はこれじゃないでしょ？」

「あ、そうだったー！」

瑠奈はポンッと手を叩くと愛奈の顔を覗き込む。その瞳はいつもとは違う、悲しげな光を放っていた。

「アイちゃん聞いた？バスケ部の『一チ。やめひやつんだって』

「ええっ……ウソッ……？マジで？」

愛奈は驚きすがりとつさに瑠奈を両手首をつかむ。それに驚いたのか瑠奈は口を見開き、パクパクと口を動かしてからゆっくりと頷いた。

「う、うん……さつき蓮くんに教えてもらつたの。や、その……未来君の様子もおかしかったから……」

「あ……」

瑠奈が視線をそらしながらくちづいて話した。愛奈もそれは同じ。

「これで未来の混乱の意味がわかつた。新人戦が近い、この時期で未来はきっとピコッピコリしているはずだ。その時にこの事態では……」

「ありがとね、瑠奈。あたし、部活見てくる。瑠奈も部活頑張って！」

「あ、うん……じゃあね！」

軽く手を振つてから愛奈は廊下を駆け出した。まっすぐ行けば体育馆。

暗い廊下は酷く冷たかったが愛奈は構わず走り続けた。

「あ、水崎！」

「蓮！……ねえ、コーチが辞めるって話……」

「……うん。本当らしーぜ。未来に言つたら、その……」

「気にしないで。アイツが先走つただけだし」

体育館に着いたときに蓮が話しかけてきたのでコーチについて聞いてみると本当だつたらしい。

愛奈はそつと蓮の肩越しに未来の姿を見つめたがその背中はいつになく……冷たかった。暗かつた。実際はそうではないけれどそう、感じた。

「とつあえず、未来には帰りに聞いてみる。部活続けてて？」

「あ、ああ……」

蓮にそつ告げて愛奈は部室の片づけを始めた。

その背中を見つめる人がいることにも気付かず

「未来～」

「お、遅かつたな」

「んー……『メン』

笑いながら言つたけれども……ちゃんと笑えていただろ？

愛奈はあの後、男子バスケ部部長、女子バスケ部部長とともに校内放送で呼び出され職員室へ向かつたのだ。

そして告げられた。あの噂の真相を。

「今週につけで俺はコーチの職を退職することになった。残念だけど……これからは遠くからお前たちの勝利を祈つていろよ」

「コーチの言葉はこれだけだった。そう、これだけ。愛奈は言葉もなく部長たちと共にただただ顔を見合わせ、「ありがとうございました」と頭を下げた。

やめてしまつにこれだけの言葉しかなかつたのだ。愛奈には「ナゼ？」といふ言葉が頭の中を駆け巡つていた。

「愛奈？…どうした？」

その声にハツとし、愛奈は我にかえる。目の前には夕焼けの逆光で輪郭を縁取られた未来の顔があつた。少し離れ、顔をそらす。

「『メン。 ただの考え方』

「あつや……あのや」

未来は愛奈の隣に並ぶと気まずそうに視線を足元に落とした。その横顔はやけに……大人っぽい。別にカッコいいと思つたわけではない。

「その……今日、『メンな。俺、おかしかつたよな？マジ『メン』

そう言つて頭を下げる未来。その姿が妙に遠く見えたのは氣のせいだろうか？

愛奈は未来の頭をポンポンと叩くように撫で、「ヤーヤー」と笑つてやる。

「いーのよお、別にいー。愛奈ちゃんがいなかつたら未来君はジーなつてたことか……」

「ふつー…なんだよその言い方ー。アハハハ！」

「うわー！失礼だなーー。ほんとの事じゃないのよーー！」

いつもの喧嘩。やはり……氣のせいだ。未来は未来。愛奈の幼馴染であることは変わりない。

たどえ何があつても。

だが、この出来事をきっかけに愛奈と未来はすれ違い始めるのだ

予感 【AINA】（後書き）

わたくして……久しぶりの更新です！！

中身はあれですよ？

続きが楽しみになる書き残し方しましたよ？

え、だつてその方が最上級フツヽ(=)。 。)

ありがとうございました？

秋空【MIRAI】

なんだか気が冴えない。特にこれと書いて思い当たる節はないが……

未来は部活の練習中、フツとため息をついた。

コーチは結局この高校のバスケ部を去って行つた。それからもうすぐ1週間。それはつまり新人大会の始まりを告げるものだつた。未来たちの高校の相手校は『丘の上高等学校』。そこそこ偏差値も高いし、バスケも強い。いわゆる強豪校だ。

よりもよつて相手がこれじやあ結果なんて……目に見えたようなものだ。

「はあ……」

「や」「お……」

「イテツ！？誰だよ！？」

言葉と共にバレーボールが飛んできた。それは未来の後頭部に直撃し、未来は声を荒上げながらそのボールが飛んできた方向を睨みつけた。

その先にいたのは

「なーにが『誰だよ』だつての……さつさと走れアホ未来！？」

またこれだ。愛奈の言葉に未来はまたため息をついた。愛奈もピリピリしているのだろうか？最近急に厳しくなった気がする。もしかしたらコーチがいなくなつたから、その分頑張っているのか？それもあり得ないことではない。

そんなことを考えつつ未来は少しだけ気を取り直して「ホールの中を駆け巡った。

「まつたく未来と愛奈は仲いいよな」

「どうからどう見たらいいなんだよ……」

湊が笑いながら声をかけてきたと思つたらしくなりそんなことを言つてきた。未来はうんざりといった表情を浮かべながら首を振つた。

練習時間もあとわずか。今は最後の練習メニューの前に休憩をとつていてる。

休憩時間になると男子も女子も仲良くな話し始める。やはり同じ部活内でのカップルは多く、バスケ部だけでも部員の半分は女子バスケ部にカノジョがいるやつらばかりだ。

「愛奈くらいならすぐにカレシ、できそーだけどな」

「はあ？ あんな暴力女のどこがいいんだよ？ 意味分かんねえ……」

「はははーよく言つたなあ。幼馴染だろ？」

湊は笑いながら愛奈を見つめる。未来も愛奈を見ると愛奈は他の男子部員に囲まれていた。正確に言つとまあミーティング的なものだが、湊の言つように愛奈はまあ……顔もいいし頭もいい。スタイルだってそこそこだし、まあモテると言えばモテてるのだろう。

愛奈の囮んでいる部員の中にも結構な人数が愛奈を好いていふといつだから驚きだ。

「つてか、なんでそんなこと気にしてんの?あ、もしかして……」

未来は湊の横顔を見ながらにやりと笑つた。すると案の定、湊は慌ててこちりを振り返つた。

「な、バカ! ! んな訳ねーだろ! ? オレがいつ愛奈の事好きだつて言つた! ?」

「バーカ。オレはそこまで言つてねえよ~」

「……ちえ。隠してたのに……誰にも言つたなよ?」

「わーつてるよ」

適当にあしらつて未来は立ち上がり、グッと背伸びをした。背骨がぼきぼきとなり、少しだけ気分が晴れた気がする。

湊は顔を赤くしたまま未来の顔を見上げてふう、とため息をついた。

未来はそんな友に温かな微笑みをこぼしながら愛奈へと目をやる。

愛奈は 愛奈の横顔は未来の知つてゐる愛奈より、大人びて、綺麗だった。

「で、明日は夜練もあるんだ?」

「そ。 参加できるか聞いて回つたらみんな大丈夫だつて」

「そつか。 よかつたな、みんな来れて」

帰り道。 未来は愛奈から明日の予定を聞いていた。 どうやらそつきのミーティングは夜練の事について話していたらしい。

最近は日が落ちるのが早く、空には星が投げ出されたように輝いていた。 その輝きが妙に悲しげに見えるのは、オレだけか？

「何したの、未来？ 星見るなんて珍しーね？」

「あ？ 別にいいじゃん。 たまには見たくなんの！！」

「あははー！ そつか、未来もそーゆーの好きなんだね。 あたしも大好き」

『大好き』。 その言葉にドキッとした。 一瞬だけ。 隣の愛奈を見ると優しい微笑みを浮かべながら星空に目をやつていた。 その横顔はいつも愛奈。 怒りっぽくて、ほんの少しだけ女らしい幼馴染。 ……別に変な意味で言ったわけではないが。 ジーっとその横顔を見ていると愛奈が急にこちらに目を向けてきた。 突然目があつて未来は視線を泳がせる。

「なんでジツと見てんの？ 何かついてた？」

「あ、いや。 髮長いなあつて」

「はあ？ 何ソレ」

そう言つと愛奈はくすりと笑つて視線を前に戻した。 未来はホッ

と胸を撫で下ろして心中だけでため息をつく。

幼馴染なのになんでこうも変わつてくるのだろうか？昔は兄弟のように何をするのも一緒で遂には高校まで一緒になつて。

それなのにここに来て今さらながら男と女の差が見に見えてなんだか少しがびしいと感じた。

新人大会。それまでに気持ちの整理がつくといいのだが……

秋空【MIRAH】(後書き)

……すみませんでした。

全然更新していませんでした。それどころか話がまたしてもういち
やしけいや！

あはは もつここや (ふざけんな)

記憶 【AINA】

今日、これから夜練がある。愛奈はふうとため息をつきながら荷物を詰めていた。

明日はいよいよ新人大会。自分たちの代、と言つことも影響しているのだろう、緊張する。

マネージャーが緊張してもあまり意味はないのだが……

「後悔はしてほしくないな……」

手を止め、ぽつりとつぶやく。フローリングをぼーっと見つめ、愛奈はペタンと腰を下ろした。

せめて、未来たちには決勝まで行ってほしい。

愛奈が高校に入つて初めての大会では見事優勝を飾り、県大会まで駒を進めた。だが、県のレベルは高い。県大会では一回戦敗退という結果で終わってしまったのだ。

今年の三年生の代の新人大会は勝機こそ見えたものの最後の一歩が足りず、4点差で一回戦敗退。

そして今年の総体では一回戦まで進んだものの『丘の上高等学校』

今回の相手校のに負けてしまった。

だからこそ

「県大会、なんて無理かな……？」

高望みしてしまうのだ。

静まり返った夜の高校。その横の体育館だけが明るく輝いている。
バスケ部の夜練だ。

愛奈は色々考えているうち、準備することを忘れ慌てて家を飛び出してきたのだった。

もちろんのことだが、完全に遅刻だ。

大慌てで高校の門をくぐると一年生のものだらう、甲高い声が外まで聞こえてくる。愛奈は荒れた息を整えながら体育館の下駄箱に乱暴に靴を入れ、体育館の重い扉を押し開けた。

扉を開けた瞬間、感じるのは汗のにおいと熱気。そしてボールが跳ねる音とバスケシユーズがキュッキュッと床をこする音が聞こえる。もちろん、気合の入った掛け声も。

「おせーよーなにしてたんだよ

靴をはくため下を見ていた愛奈の頭上にかけられた言葉。声の主から未来だと分かった。

「じめんって、ちょっと考え方してたら時間忘れたの」

靴をはきながらそう呟いて愛奈は顔をあげた。
すると田に入ったのは珍しく前髪を結んだ未来の姿。Tシャツにハーフパンツ。ナンバーリングをつけた彼は額に汗をかいていた。

「考え方?」

未来は汗をTシャツの袖で拭いながらそう言った。

「明日の事なら大丈夫だつて、オレがいるんだから」

「アンタだから心配なんだよ……」

「あー? 何が心配なんだよー。」

「うー、と唸りながら未来は愛奈を睨みつける。それに対しても愛奈は首をかしげ、微笑んでみせた。

そんなやり取りをしていくとこちらに気がついたのか女子部長の羽賀なつきと男子部長の大知悠が駆け寄ってきた。

「遅かったね、愛奈」

「体調でも崩したのかと思つたよ」

「「めんねえ……」

女子部長のなつきは華奢な体つきからは考えられないほどバスケがうまい。なによりドリブルの速さとシートの正確さはば抜けているのだ。性格は男っぽいがそこがみんなに好かれている。

男子部長の悠は成績優秀で生徒副会長までやっている。冷静な判断と正確なパスが彼の特権だ。性格は穏やかで怒った姿を見たことはないに等しい。

二人とも、信頼できる人間だ。

平謝りの愛奈に悠が慌てて手を振った。

「遅刻とはいえてくれたんだから良いよ。それで、俺たちから相談なんだけど、いいかな?」

「うん、何?」

「実はさあ……」

愛奈が頷いてからなつきが間髪を入れずに作戦板を取り出した。相談とは明日の攻め方についてだった。マネージャーから見ての動きのアドバイスだ。悠も同じ相談らしい。

愛奈は一年生に明日の準備を頼み、一人と共に作戦板を取り囲んだ。

その間にいつの間にか未来は練習に戻っていた。

「……よし、ありがとうーこれなら大丈夫かも」

「うん、この作戦なら湊が一番あつてるもんね。ありがとう、愛奈」「うん、あたしにはこれくらいしか出来ないけど……明日に向かってがんばろー！」

愛奈はオーッと言つて腕を高く振り上げた。なつきもそれをまねて笑顔になる。「人はもう一度『ありがとうございます』と言つと練習に戻つて行つた。

その一人の背中に小さく「頑張れ」と呴きながら愛奈は明日の準備に急いだ。もちろん練習している部員たちのドリンクやタオルの準備もだ。

一年生の女子はきちんと手伝ってくれるが男子をもなるとなかなか言つことを聞いてくれない。けれど、私語をしているわけではない。ちゃんと未来たちの練習を見ているのだ。

愛奈はふ、とため息を落としコートに背を向けタオルを氷水から取りだして絞る。氷水から上げた細い手はかじかみ、赤くなつてい

るがこれくらい、練習している部員達に比べれば辛くなんて、ない。

その時だった。

「あつーー?」

「先輩ーー!」

一年生の男子がざわざわと騒ぎ始め、コートの中に入つて行く。愛奈はどうしたものかと振り返る。だが、聞いた誰かの声に思考が止まつた。

未来!

未来? 未来がどうしたの?

愛奈は嫌な汗を背中に感じた。寒いのに汗が噴き出る。恐る恐る振り返つてみると、目に映つたのは

みんなに囲まれているダレカ。倒れている『ダレカ』。

そのダレ力を理解するまで何秒かかっただろ? ダレ力を理解する前に視界がうるんで景色がにじみ出す。愛奈の思考が始まつた瞬間、反射的に叫んでいた。

「 未来ーー!」

過去に味わつた恐ろしいほどの虚脱感……あの時の嫌な感じがする。

愛奈は記憶を巡つていた。

記憶 【AINA】（後書き）

久しぶりの投稿です。
すみませんでした。

痛み【MIRAI】

頭が痛い。とても。

田覚めたとき、未来は見覚えのない部屋にいた。いや、『空間』と言つた方が正しいのかもしれない。

『 いじは……つつかーー。』

未来は頭の割れるような痛さに顔をしかめた。なんだ、この頭の痛さは。打った記憶も、何かが当たった記憶もない。

それに、ここはどこだ？ 急に飛ばされたようなものだ。もちろん、頭の事と同じ、記憶にはない。

『 それに、声が……？ いじもつてるのか？』

何がそいつをせているのかは分からぬ。耳がおかしくなったのか、この空間がそいつをせているのか？

どこだからない空間でこんなことになるとは……まったく、厄介な事だ。イライラする。

『 はつ……ついに頭イッたのかな……』

自分の言葉に自嘲の笑みをこぼしながら未来は額に手を当てた。未来は頭上を見上げてみた。だが、周り同様、白い空間のみが存在する。どこまで続いているのだろうか……そんなことを思いながら手を伸ばしてみた

「未来！… 未来つてば…」

「ちよ、愛奈、落ち着いて！？ 頭打つてるやつの頭打つてビース
ンのー？」

愛奈となつきの声がする。
頭がジンジンと痛かった。

「……てえ……」

さりなる頭の痛さに未来は重いまぶたを開けた。今度は頭だけじ
ゃなく、体も痛く、しかも重くてだるい。吐き気すら覚える。

「未来、頭打って氣絶したんだよ。他のところは大丈夫？ 痛いと
こない？」

愛奈が未来の顔を覗き込む。その目がうるんでいるのは気づかな
いふりをした。

そして、自分の体の異常を確認する。

「足が痛い」

素直にそう言つた。右足首が異常なほど熱く、ジンジンする。よ
く見るとそこには明らかに腫れあがっていた。

それに気がついたらしい悠は田を見張りせてとつせに未来の足も
とこしゃがみこんだ。

「な、何だよ？」

「痛かつたら痛いって言つてね？」

悠は未来の質問には答えず、ただそう早口に言つた。自分の発言を無視されたことに少しイラッとしたが未来は黙つて頷いた。

そして悠は未来の足首に触れ、腫れあがった部分を押す。

「つつ！？ な、何すんだよ！？」

「やつぱり」

「てめ、聞いてんのか！？」

未来の言葉は完全に無視だ。悠はそつと未来の足首から手を離した。

そして、言つた。

「 明日の大会は 」

その先の答えは聞きたくない事実。分かっていた事だけに心臓がえぐられたような痛みだった。

そしてその次に浮かんだ感情に俺は

痛み【MIRAH】（後書き）

やっと更新できました。しかしながらまた更新があきます。

後悔 【AINA】

「明日の大会は、無理だ」

凛とした声が体育館に響く。

次にその場を包んだのは沈黙だった。シンとした空気が流れる。思考が始まつたとき、愛奈の心を搔き鳴りていったものは、後悔だった。

「……何言つてんだよ」

沈黙を破るように彼が 未来が口を開く。その声は、震えていた。

腕に力を入れ、足をかばうようにして、顔をゆがめて
未来は悠の腕をつかんだ。その様子は、何かにすがつているよう
に見えて、息が苦しくなった。

「大丈夫だよ、こんくらい。出れるつてい

「ダメだ。こんな怪我しているお前を出すわけにはいかない。骨折
まではいつでないけど、たぶん、ひびは入ってる。走ることは愚か、
歩くことだってきついはずだよ?」

悠の諭すような声で、未来は押し黙った。
確かに、この腫れは普通じゃない。

それに、悠は医者の息子だ。きっと、彼の言つていることは正しい。

また、沈黙が流れれる。

みんなは、一体何を思つてゐるのだろう。

未来を同情しているだらうか？ それとも

「「」ねん」

不意に自分の顔から「」ぼれた言葉で、愛奈は驚き、悲しかった。
みんなが一斉に「」ひけらを見る。

その顔はみな、不思議そうに眉をひそめていた。

愛奈はそんなみんなから田をやさしおながら拳を握る。

「あたしが、今日夜練入れなかつたら……こんなことには

「何言つてんの愛奈……？」

「愛奈のせこじやないでしょ？ 「」つと、誰のせこでもないよ」

「「」だよ」

女子の声がたくさん返つてくるが、それでも愛奈の心をほぐすまでには至らなかつた。

円陣の中心に力なく座り込んでいる未来が、「」ひけらを見てこるのが分かる。

その表情が、一体何を語つてゐるのか 愛奈にはわからなかつた。

「オレは……」

未来が口を開きかけ、また閉じる。

それと同時に自分に向けられていた田も開ざされ、愛奈は酷い孤独を味わわされた。

彼が何を言つたかったのか。

自分に対することだろうか。

結局、何一つとして分からない。

「とにかく

この場を空氣を変えるように手を叩いたのはなつきだった。

見れば彼女は真剣な面持ちをして未来を、そして自分を見つめている。

みんなの視線が自分からなつきへと向けられた。

「未来をこのまま放つておけないでしょ？ 病院に運んで、診ても
らわなくちゃ 悠の言葉を疑ってるわけじゃないよ？ ただ、ち
ゃんとした治療を受けないと、回復が遅くなっちゃう」

「…………」

す、と未来に向ける目がどこか気遣わしげだつた。

何もかも、自分以外のすべての物を閉ざすように未来は目を閉じ、
力なくうなだれた。

それを肯定ととつたのか悠は未来に肩を貸し、立たせてやる。反
対側には湊がついた。

立たされ、足を引きずりながら遠ざかっていく未来の背中を見る
のが辛かった。

三人を見て、部員たちが散らばる。片づけを行う者、三人を追う
者、車の手配をするためか、携帯電話を握りしめる者。

知らず、拳に力が入り、鼻の奥がシンとする。どうしよう、泣いてしまいそうだ。

(また、あたしのせいで傷つけてしまった)

途端脳裏をよぎったのは父の姿だった。

父は、今入院している。

意識は無い。昏睡状態だ。

まだ幼かった愛奈はたくさんのことに対する興味があった。だから、あの日もその感情に任せて、自分よりも年上の 小学校高学年くらいの男の子たちに近づいたのだ。

彼らは幼い愛奈を見て、にやにやと笑い、大きな道路を指差した。あそこを渡つたら、すごく素敵なものあげるよ、と言つて。そこからは記憶が曖昧だつた。それでも、そこでの記憶だけはまさかとよみがえる。

母から、姉から聞いた言葉によると、自分は車がたくさん通つて

いる道路を渡ろうとしたらしい 信号なども使わず。

そして、轢かれそうになつたのを庇つた父が

結局、また自分の所為で傷つけてしまった。

どうして、自分に関わる人は傷ついて行くのだろう。

私は

不意にあたくなつた拳にハツとして顔を上げるとなつきが愛奈の顔を覗き込んでいた。

見れば、彼女は強く握つて白くなつた愛奈の拳を両手で包んでくれているのであった。

その表情は優しくもあり、気遣わしげである。

「愛奈のせいじゃないよ。部活中の事故なんだから。それに、バスケに怪我は付き物でしょ?」「

「……うん」

頷いたが、心は晴れない。

それほど、愛奈の心の傷は深かつた。

未来が負つた傷は、体だけではない。心も傷を追つて いるに違
ない

一体どんな顔をして未来に会えればいいといふのだろうか。
愛奈にはわからなかつた。

後悔 【AINA】(後書き)

しばらく更新をしていませんでした^ ^ ;

お気に入りに登録してくださった方、申し訳ありませんでした。

これから不定期になるかどうか、私もよく分かりません。

けれど、なるべく愛奈、未来のこれからを追つべく更新ペースを上げて行こうと思っていますので、どうぞこれからもよろしくお願ひいたします！

鳴囁【MIRAI】

なすすべなく病院へ送られ、今はベッドの上に屈る。悠の言つた通り、骨折はしていないがひびが入つたらしい。走ることはもちろん歩くことも難しい。全治一ヶ月。最悪だった。

「…………」

一人悪態を吐く。その悪態を聞く者はだれもおらず、しんとした無機質な白の壁に吸い込まれていった。今日は入院らしい。だが、明日には退院できるので、ギブスを巻いて大会に行くつもりだ。でも。

(どうせ俺は出られねえ)

未来は右手でがりがりと頭を搔いた。眉間に深い皺があり、左の拳は震える。

月明かりに照らされたこの部屋に一人。 そう、一人。

「いつもそうなんだ。俺は……」

体を倒し、ベッドに寝転がる。右手は頭から滑らせるようにして目の上に置いた。

何も見たくない。

何も聞きたくない。

何も、何も

つう、と一筋の『光』が未来の目から流れおちた。それはとどまるふことを知らず、次々とあふれだしていく。

結局俺は何もできなこま、変わらなこまなんだ。

鼻の奥がツンとする。呼吸が乱れ、嗚咽がみつともなく自分の喉から出でくる。

泣くなよ。とまれよ。俺は泣きたくなんてねえんだ。

そんな思いとは裏腹に、涙は止まることを知らないかのようにあふれ出た。

なんで泣いてこねんだらう。なんで俺は不意に廊下からじり、と何かが落ちるよつな音がした。

その音に驚き、思わず息を呑む。

未来は腕で涙をぬぐうと体を起こした。

「……誰かいるのか？」

深夜という時間帯ではないが、消灯時間はとっくに過ぎてこむはずだ。

看護師か？

田を凝らして病室のドアにつけられた曇りガラスの向こうにいる人物を見つめる。

「誰だよ」

「……っ」

「愛奈？」

小さく漏れた声に幼馴染の少女の名を呼ぶ。

だがその声の主は病室に入ろうとはしなかった。ましてや開けようともしない。ドアに寄りかかったのであらう、ガタンと小さな音が鳴った。

「……」めんね未来。あたし、いつも空回り。みんなの為、つて

いつも余計なことして、傷つけて

「…………」

「あたしが悪いの。だから、『ごめん』

震える声で告げられた懺悔の言葉。

胸が締め付けるように 切りつけられるように痛む。

バスケに怪我は付き物だろ？ お前のせいじゃない

（なんと言えねえんだ）

未来の喉は言葉を吐くことを一瞬にして忘れてしまったかのようだつた。声が出ない。出せない。喉の中心で突つかかって出てこないのだ。

未来は愛奈の言葉を胸の中で反芻しながら愛奈の過去を思い出していた。

愛奈の父親が、愛奈を庇つたために昏睡状態なのは知っている。そのせいもあるのだろう、愛奈は自分に関わる誰かが傷つくと自分のせいだと思い込んでしまうのだ。

早く言葉を出さねば。

焦る心を落ち着かせ、言葉を紡ぐとする。

だが、今度は何を言えばいいのか分からなくなつた。

バスケに怪我は付き物だ。だからお前のせいじゃない。たとえ言つたとしても彼女は余計に自分の責めるのではないか？ そう考へるどどつしても言葉を紡ぐことが出来なかつた。

「…………」

す、と扉から気配が遠ざかる。月明かりに浮きあがつていた人影

が消えた。

「愛」

名前を呼ばうと少し体を動かした瞬間、足に鈍く、激しい激痛が伝わり、未来は悲鳴を呑みこむことがやっとだった。

くそ、なんなんだ。

自分の体が言う通りにならないことがこんなにももどかしいものだつたのか。

未来は唇を噛み、うつむいた。

一人うなだれる少年を照らす月明かりは何処か悲しげだった。

存在【AINA】

「ごめんなさい……」

愛奈はただ心の中でそう何度も何度も繰り返していた。

「ごめんなさい…………！」

息が苦しい。いつの間にか走り出していた。だが、どこに向かっているのだろう……

『愛奈？』

つぶやいた幼馴染の声音が耳から離れない。

どうしていつもこうなのだろう。自分にとつて大切な人はいつも傷つき、離れてしまう。そんなこと、望んでいない……

息が苦しくなり、足をとめた。気がつけばそこは幼いころによく未来と来た公園

「…………」

何度も酸素を肺に送り込みながらその公園を見渡す。

もちろん、暗くて全体を見渡すことはできない。できなければ、記憶は鮮明に思い出された。まだ幼く、何も知らなかつたあの頃あたしは、なんて罪深いのだろう。いったい、何人傷つければいいのだろう。

わからなかつた。

わからないから……この負の連鎖が続いてしまうのだろう。

ふと見上げた夜空には星一つ見えなかつた。

大会当日。未来が抜けた分には一年生が入ることになった。中学の時からバスケ部で、部長を務めていたらしい。もちろん技術は申し分ないが、未来には届かなかつた。

「未来、大丈夫かな」

……大丈夫だよ。未来だもん」

ふと投げかけられた言葉に胸がえぐられる思いだったが、**平静**を

450

一人が乱れれば、チームも乱れる。たとえそれがマネージャーだったとしても。いや、マネージャーだからこそ、だ。マネージャーは選手を常に見守り、励まさなければならぬ。一年前からずっとやってきたことなのに、今更それが身にしみる思いだつた。

その時、唐突に審判の笛が鳴った。試合開始の合図だ。

「これより、丘の上高等学校対桜田南高等学校の試合を始めます。
さくらだみなみ

「お願いします！」

我が桜田南のセンターがジャンプボールへと入る。丘の上のセンターは中学のころから有名な一年生だ。背なら負けていないが、ジャンプでどうしても負けてしまう

ボーラーの先導権を握ったのは、

「蓮！！
行くぞ！！」

「おう！」

桜田南だった。

思わず気持ちが沸き立つ。

応援席の女子たちが悲鳴にも似た歓声を上げた。

「行けーっ！　そのままショート…！」

誰かがそう叫んでいる。

愛奈は片時もボールから目を離さず追っていた。

昨日の練習でやったバス回し。フォーメーション。つまく通っていた。

だが、昨日、この練習中に

「ナイッ シュート…！」

ひとりわ大きくなつた歓声にハツとした。

ふと顔をあげれば桜田南がショートを決めていた。スコアを握りしめ、愛奈は今の試合だけに集中する。

（今は試合にだけ集中しなきや。勝たなきや、未来は試合に出れな
い……）

入院は余儀なくされたが、もう一度とバスケができなくなるわけではない。しかも勝ち進めば県大会がある。県大会までには期間があるし、勝てれば未来は試合に出ることができるのだ。

だから。

（お願い　）

ペンを握る指は細かく震えている。心臓は大げさな音で鳴っている。

(勝つて　！)

ただ祈ることしかできなくても。声を掛けてあげることしかできなくても。

これがあたしのできることすべてだから。

目の前には激しい攻防を繰り広げる選手たちがいる。隣には声の続く限り叫び続ける仲間がいる。

未来。みんな、がんばってるよ

今は病院で一人仲間の勝利を祈っているあるうつ未来にやうづぶかれ
やいた。

ハーフタイムにはいり、選手たちが戻ってきた。みな、汗でユニフォームが体に張り付いて気持ち悪そうにしていた。

一年生がタオルを配り、愛奈たちマネージャーは飲み物を用意する。その間に顧問が選手に指示を出す。

いつもの光景だが、ここで疲れ切った選手たちをいやすのが未来的の役割だった。

明るく、周りをひきつける力がある未来はよどんだ空気の中でもみんなを引っ張ることができた。それみんな救わっていたのだ。だが、今彼はいない。それは、みんなにいったいどう影響しているのかは一目瞭然だつた。

(みんな、何も言わない)

言葉を発するのも億劫なのか、それとも言葉にできないのか。

点数は五点差で桜田南が勝っている。だが、まだハーフタイム。
油断はできない。

「……よし。みんな行つて来い！……これに勝てば一回戦だ。未来
のためにも頑張つてこい！…！」

顧問がキャプテン、悠の背中を強めに叩くと選手の目に少し光が
戻つたような気がした。

「おっしゃあ行こうぜ！…！」
「未来にも試合に出でもらわねーとなー！」
「桜田 ファイ！…！」
「オオ！…！」

円陣を組んで声をあげた選手たちを見て愛奈は言葉を失つた。
みんな、未来のために頑張ろうとしている。
彼はそんなにもみんなに好かれていたのか。
複雑 だつた。なぜかは分からぬが、モヤモヤした。

(あたし 変)

「ピ …！」

体育館に高らかに音が鳴り響いた。

愛奈は心にかかる霧を気にながらもコートに視線を送つた。
もうすぐ、試合に決着がつこうとしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2852k/>

雪はやまない

2011年10月6日16時40分発行